

## 第 12 章

### その他の長篇・中篇小説

(The Other Novels)



“And I take you all to witness, all you present and all you repeat my words to, that I’ll work on as long as I have life in me, that I’ll use every opportunity that’s given me to uphold the cause of the poor and down-trodden against the rich and selfish and luxurious [ . . .].” (From the speech of Richard Mutimer: *Demos*, Chap. VI)

## 第1節 社会問題小説家としての出発

## 『暁の労働者たち』（1880）

1878年に出版を断られた最初の小説が生計のために書かれた駄作であったにもかかわらず、ギッシングは次に試みた『暁の労働者たち』において、まったく異なった計画にとりかかった。<sup>1</sup> 弟ウィルが1880年の春に死んだ直後、そして『暁の労働者たち』の出版をとりつけるのに成功してから3ヶ月後に、ギッシングはもう一人の弟アルジェノンに宛てた手紙で、道徳的な責任感がしだいに小説を書くことの動機になりはじめていると述べている。<sup>2</sup>

コント的な使命感に促される形で書かれたこの2番目の小説で、ギッシングは、スラムで目の当たりにした貧困を強烈で偽りのない表現でとらえることに、彼の才能を真摯に向けた。<sup>3</sup> そうすることによって、それまでリアリティックにとらえられたことのなかった下層階級の生活に、初めて光を当てることになるだろう、と考えたからだった。

ギッシングが取り組んだ仕事は、時宜にかなったものだった。なぜなら、1870年代の不景気が、産業革命初頭以来のイギリスの社会状況をさらに悪化させ、「社会問題」を非常に重要なものにしていたからである。

ギッシングが『暁の労働者たち』でよみがえらせた社会抗議文学の伝統は、もともと最悪の貧困時代、つまり1830年代に対する反応としてあらわれた。工場法改正や衛生管理に関する政府の委員会報告書や、産業主義を痛烈に非難したカーライルの『過去と現在』(*Past and Present*, 1843)、エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』(*Condition of the Working-Class in England in 1844*, 1845)、ヘンリー・メイヒュー(Henry Mayhew, 1812-87)の『ロンドンの労働とロンドンの貧民』(*London Labour and the London Poor*, 1862)によって、社会状態についての直接の情報が得られるようになった。そして、1845年から1860年までの社会状況は、人道主義的な小説家の一派に読者からの怒りを誘発するのに十分な題材を提供した。ディズレーリの『シビル』(*Sybil*, 1845)、ギヤスケル夫人の『メアリ・バートン』(*Mary Barton*, 1848)と『北と南』(*North and South*, 1855)、キングスリーの『イースト』(*Yeast*, 1848)と『オールトン・ロック』(*Alton Locke*, 1850)、ディケンズの『ハード・タイムズ』(*Hard Times*, 1854)は、貧しい人々の生活についての強烈な印象を与え、貧困によって生みだされた苦悩、犯罪、社会対立を生き生きとした表現で描いた多くの小説の代表である。しかし、それらの作品にあらわれている改革の精神は、多くの場合、宗教的でロマンティックなものであり、保

守的なものだった。ブラウニング夫人の有名な詩、「子供たちの叫び」(“The Cry of the Children,” 1843)は、この抗議の時代の主調音として見なすことができるが、それは貧困の恐怖を描くことで、読者の感情をかきたてようとしただけだった。つまり、もっぱら読者の心に、訴えようとしたのである。

19世紀の半ばに状況が改善されると、社会抗議文学は消えていった。1860年以後は、ディケンズの『われらが共通の友』(Our Mutual Friend, 1864-65)という注目すべき例外を除いては、重要な社会小説はあらわれなかった。しかし、1870年代の不景気は古い社会問題を再びよみがえらせ、新しい抗議の波が押しよせた。ギッシングがロンドンで生活を始めたころ、力強い——といっても必ずしも暴力的ではない——革命の精神が社会の中に感じられ、1880年代の社会改革文学は、科学、哲学、政治学の面での発展に呼応した新しい方法を獲得していた。ロバート・オーエン、コント、ハーバート・スペンサーらの仕事を通して社会改革に導入された科学的な目的意識によって、19世紀半ばの曖昧でセンチメンタルな人道主義がとってかわられることになったのである。

人間についての新しい科学、すなわち社会学の登場によって、社会を合理的に整えていく法則が経験主義的な方法を通して得られるように当時の人々には思われた。共感だけでなく、有用な情報を得ようという熱望に促され、科学的調査という新しい分野が、体系的な社会学的計画に活発に乗り出していった。例えばベアトリス・ウェッブ (Beatrice Webb, 1858-1943)は、この新しい科学を彼女の専門とし、住宅環境やロンドン港湾労働者の搾取の状況について、重要な事実を明るみに出した。フェビアン協会 (Fabian Society) はその有名な機関誌で、貧困、住宅環境、市政など、その他多くの点に関する情報を発表した。事実そのものに事実を語らせようとしたのである。

社会調査の頂点、そして多くの意味でその集大成と言えるのが、チャールズ・ブース (Charles Booth, 1840-1916)の『ロンドン市民の生活と労働』(Life and Labour of the People of London, 1903)であり、それはかつてのメイヒューの著作に対応するものだった。ブースは1886年に調査を始め、その結果を1889年から発表した。最終的に彼は、ロンドンの労働者の日常生活、労働、信仰について、17巻に及ぶ事実に基づいた描写豊かな資料をまとめあげた。ブースのロンドンは、ギッシングが知っていたのと同じロンドンであり、メイヒューの著作がディケンズのリアリズムを証明しているように、ブースの詳細な観察は、ギッシングのリアリズムの正確さを証明している。ブース自身が、貧しい人々の生活についての信頼できる情報を与える数少ない小説の

ひとつとして、ギッシングの『民衆』を挙げ、ギッシングの作品の社会史としての正確さを認めていた。

『暁の労働者たち』は、社会抗議の小説と、思想のドラマという2つの意図をもっていた。小説の構造の点から言えば、『暁の労働者たち』はなんらオリジナリティーを示していない。というのも、メイン・プロットとサブ・プロット、多くの登場人物、描かれる社会の幅の広さ、多くの出来事を取り入れること、すべてを説明すること、幾通りもの語りのスタイルや関心をまぜあわせること、といったヴィクトリア朝の伝統を、ギッシングが無批判に受け入れているからである。しかし、スラムでの生活を身近な視点からリアリストティックにとらえている点で、ギッシングは確かに新しい側面を切り開いた。彼は、後に『無階級の人々』の中でウェイマークによって述べられる計画、つまり、貧しい人々の生活を「深く掘り下げる」“digging deeper”という計画に沿って書いていたのである。危機的でセンセーショナルな場面のみに関心を限定する、彼以前の社会小説家たちの傾向に倣うのではなく、貧しい人々の日常生活を描くことで、ギッシングは彼らの生活の感触をとらえることに成功した。

『暁の労働者たち』は、その物語の大半が、芸術的な才能をもち、自分が生まれ育ったスラムの社会状況に対して何かしなければならぬ、と感じるアーサー・ゴールドディング (Arthur Golding) という若者の生涯に関するものである。自分を取り囲む状況に強いられて、彼は、かたや労働者階級の友人たちと政治改革という生活と、かたや裕福な絵の教師のアトリエでの芸術の生活という2つの場所の間を行き来する。キャリー・ミッチェル (Carrie Mitchell) という貧しい墮落した女性への同情から、彼女の友人となり、彼女と結婚する。そして、彼の急進主義は、彼女の人格を矯正し、教育する試みに彼を導いていく。彼の妻が彼の試みに応えることができずに彼から去ってしまうと、ゴールドディングはヘレン・ノーマン (Helen Norman) という洗練された知性のある女性に向かっていく。だが、二人の関係は、お互いの愛情にもかかわらず、ゴールドディングが結婚していたことをヘレンが知ったときに終わりを告げる。意味のある人生を求めての、失敗つづきの過程を通して、ゴールドディングは、当時の多くの社会改革と出会い、それらを否定する。小説の終わり近くで、大西洋を渡っているとき、彼は嵐の海を眺めて、つかのまのワーズワスの静謐を体験する。しかし、アメリカに着いた後に彼が得る最終的な答えは自殺である。彼がナイアガラの滝にヘレンの名を口にしながら身を投げるところで、この小説はメロドラマ的に幕を閉じる。

ギッシングは彼の小説に、客観的な印象よりも、「個人的な」性格を与えることを重視していたので、物語に彼自身のコメントを加えることを躊躇せず、しばしば一人称の記述で物語を進めることがある。おそらく、ギッシングが彼自身の体験を包み隠すことなく利用したのも、同様な意図のためだったのだろう。ヘレン・ノーマンの知的成長、ゴールディングのアメリカへの渡航、ゴールディングとキャリー・ミッチェルの結婚は、この小説の中の最も顕著な自伝的要素となっている。ギッシングは、ヘレン・ノーマンのような女性に実際に会ったことはないと述べているが、彼がキャリー・ミッチェルのような女性を知っていたことは明らかである。つまり、ゴールディングの不幸な結婚についての、ひときわ説得力のある文章は、明らかに、ギッシング自身のヘレン・ハリソンとの結婚をもとにしているのである。

ギッシングが『暁の労働者たち』の校正刷りを讀んだとき、悲しいことに、彼の目にもその欠点は認識できた。ハリソン夫人は後に、『暁の労働者たち』には、小説6冊分の内容があると同時に、小説6冊分の新人作家の欠点が含まれていると批評した。会話と物語の文章は、堅苦しく文語的で、二人の主人公たちは純真なほどに理想化されすぎている。小説のプロットは、印象的な幅の広さと力強さをもっているが、だらだらと間延びしていきがちなく、動機に裏づけられておらず、偶然の出来事が多すぎる。うすっぺらのサンキュロット主義(左翼過激主義)が生き生きとしたスラムの描写をおちこわしており、宗教に対する諷刺はあまりにも安易な誇張されたものであり、効果的というにはほど遠い。

『暁の労働者たち』の真の主題は、ヴィクトリア朝の文明がそれ自身を改革しようとする努力である。貧困は、ヴィクトリア朝社会の無秩序のもっとも顕著な症状にすぎず、また、登場人物たちが主張する哲学を厳しく試すものになっている。

このようにさまざまな思想が試される場で、実証主義は特別の位置を占めている。それはヘレン・ノーマンによって体现されている。彼女は聖職者の娘なのだが、シュトラウス(David Friedrich Strauss, 1808-74)の『イエスの生涯』(*Das Leben Jesu*, 1835-36)を讀んでキリスト教への信仰心を失い、別の信仰を求めてドイツへ行く。キリスト教の思想家、ドイツ観念論哲学の思想家を研究した後、ダーウィン、ショーペンハウアー、コント、シェリーに興味をもち、イギリスに帰って、「人類教」"Religion of Humanity"の信仰者として、貧しい人々の間で社会福祉活動を実行しようとする。しかし、最終的に彼女の新しい哲学は効果がないと証明される。貧しい人々は彼女の親切

に応えようとせず、彼女が与えたお金は飲み代にしかならず、彼女の献身と努力が何の改善ももたらさないということを彼女は知る。

ヘレン・ノーマンの期待を裏切った貧しい人々の中での体験と、自分の妻を教育し矯正しようとするアーサー・ゴールディングの無駄に終わった努力は、ヴィクトリア朝のリベラリズムの基盤となっている信条のひとつ、つまり人間の完全性という思想を否定するものである。教育と物質的向上によって貧しい人々が無知と墮落から救われるという通念は、イギリスの思想に深く根を下したものだ。精神の内容は、少数の基本的な概念を除いて、外界の体験から得られるものであり、それゆえ人間は教育と環境によって形成される、というジョン・ロックの理論がその通念の原点だった。同様にウィリアム・ゴドウィンもまた、『政治的正義』(*Political Justice*, 1793)で、判断力が生まれつきのものであるという考えを否定し、誤って直感と名づけられている能力は、後天的に得られるものと論じた。子供たちは通常、同等の能力をもってこの世に生まれてくるのであり、後の成長における差異は、教育と環境によるものである、とゴドウィンは主張した。同じ理論は、ジェレミー・ベンサムやロバート・オーエンによっても支持されている。また、急進主義哲学を信奉していた若き日のジョン・スチュアート・ミルは、教育によって人間の精神が無限に向上させられると信じていた。

貧困の問題に対する別のアプローチは、アーサー・ゴールディングの急進主義クラブによって示されている。ギッシングは、そのクラブが属する組織のタイプを、平等主義に基づき労働者が団結し、フランス革命をイギリスにもたらし、共和国を樹立しようとするものと簡単に説明している。貧しい人々に自助を訴えるこうした運動に、ギッシングは十分に共感しているが、それが社会改革のプログラムとして有効であるとは認めていない。アーサーは最後には、そのクラブから脱退する。実は、芸術と社会改革との双方からの要求に、アーサーは板ばさみになっていたのである。これは、ギッシング自身に深くかかわる葛藤だった。というのも、この葛藤こそが、ギッシングの精神を容赦なく2つに引き裂いた主要な原因だったからである。ギッシングは、小説の中では、この問題に対する解決策を提示しているが、現実の世界では、その解決策を彼自身にとって有効なものにすることができなかった。

『暁の労働者たち』の主人公アーサーは、こういったヴィクトリア朝の典型的なジレンマに捕らえられるのである。アーサーは、革命への情熱が冷めると、再び芸術へと惹かれていくが、貧しい人々をやはり助け続けねばならな

いという使命感と、芸術に惹かれる気持とを、一致させることができない。この問題の解決は、ヘレン・ノーマンによって与えられる。直接的な社会行動よりも、芸術こそがより強く文明に影響を与えるものである——というのも、芸術は精神を形づくり、社会制度というものは、その精神が具体化したものにすぎないからである、とヘレンはアーサーに教えるのである。「純粹な芸術家」になることで、博愛主義的行動や政治的運動に参加するよりも、はるかによく社会に貢献できる、と彼女は訴える。ヘレンはアーサーに、「この世において、美しいものほど役に立つものは存在せず、人類の究極的な幸福のために、力強く働きかけるものはないのです」、と語る。

しかし、ギッシングは彼自身の社会理論の矛盾を取り除くことができなかった。貧しい人々への共感ゆえの彼の怒り、環境の影響についての彼の認識、個人の自由の擁護、科学的な方法の有用性に対する信頼という点から言えば、ギッシングはベンサム、オーエン、ミルに連なる自由主義者の陣営にいた。しかし、ギッシングは、彼らの理論から引きだされる平等主義的な改革の方法を受け入れることができなかった。むしろ彼は、カーライルが民主主義に抱いていた深い不信を共有し、選ばれた少数の人々へのカーライルの信頼を（幾分変更を加えながらも）より曖昧な言い方で繰り返している。ギッシングは、ベンサムとパークとに分けられる2つの社会思想の間で、ヴィクトリア朝のイギリスそのもののように揺れていたのである。民主主義的な改革、すなわち大衆自身が自らを統治する可能性という重要な問題については、ミルでさえ曖昧な態度をとっていた。ギッシングは、単に教育の力だけで本質的な改革がもたらされるとは思っていなかった。彼は、ロンドンで暮らした最初の数年で、こうした悲観的な見方を身につけ、それを『暁の労働者たち』の中に記したのである。

このようにギッシングの出版された最初の小説は、ロンドンのスラムの探索を含んでいるのだが、スラムの現実、コント主義者あるいは急進的理想主義者になったばかりの若者を、できれば彼が認めたくなかった真実に向かい合わせることになったのである。結果として、何らかの社会改革の方法と、社会改革の可能性について何か明るい見とおしを呈示するように、フレデリック・ハリソンが熱心に促したにもかかわらず、ギッシングは何も示すことができなかった。この小説の中に描かれた、見る者の心を苛む現実によって、社会改革に対するギッシングの方法と見とおしが、すでに深く影響を受けていたからである。

## 第2節 社会問題からの一時的な後退

## 『イザベル・クラレンドン』(1886)

『暁の労働者たち』と異なり、1885年に書かれた2つの小説、『イザベル・クラレンドン』と『人生の夜明け』は、貧困、ロンドンのスラム、社会問題に関するものではない。この時点での突然の主題の変化をもたらした理由は、メレディスの影響である。『イザベル・クラレンドン』は、明らかにメレディスのために書かれている。メレディスが『無階級の人々』の採用をチャップマン・アンド・ホール社に賞賛して推薦し、その結果として、はやくも次の小説がメレディスに捧げられることになったのである。しかし、こういった事情や、ギッシングがメレディスの作品を賞賛していたという事実にもかかわらず、『イザベル・クラレンドン』を書かせることになったより直接的なインスピレーションは、むしろツルゲーネフから来ていたように思われる。

主人公のバーナード・キングコート (Bernard Kingcote) は、自己抑圧的で内省的な元医学生で、この小説のタイトルがとられることになった、洗練された未亡人に恋をする。しかし、彼は、彼女が家庭の外で活動することに反対し、彼女が他の男性と一緒にいるところを見ると嫉妬する。彼はしばらくの間、思い悩み、自分自身を苛み、そして、より地味ではあるが、うわべだけではない魅力をもった、イザベルの被後見人エイダ・ウォレン (Ada Warren) に惹かれていく。キングコートは、後にギッシングの小説の典型的なタイプとなる、自己否定的で自虐的な登場人物の最初の例である。また、彼は、ルーディン (Rudin) に代表される、ツルゲーネフの登場人物たちにきわめてよく似ている。<sup>4</sup> 小説の多くの場面となっている田舎の邸宅と庭園は、『貴族の巢』(Liza, 1858) を含むいくつかのツルゲーネフの小説に似ており、エイダ・ウォレンの性格は『貴族の巢』の主人公リーザとの興味深い類似を示している。

『イザベル・クラレンドン』は、貧困や社会悪があらわれることのない貴族的な田園の場面を描くことによって、彼の作品に見られる傾向小説 (Tendenzroman) 的な性格を一掃しようとする、ギッシングにとって意識的な試みだった。だが、彼の以前の関心が、やはりその中に入りこんでいる。イザベルが送っている生活の軽薄さにキングコートが気づくきっかけのひとつは、未亡人となった彼の妹と子供たちが住んでいる貧しい住まいから彼らを救い出すために、彼がロンドンに向かうことである。その後まもなく、キングコートは、自分の幸せを求めるのではなく、人に幸せを与えることを優先

しようと決意する。しかし、ギッシングは、全体としてみれば、社会批判があまりにも多くの関心を奪ってしまう弊害から、うまくまぬがれることに成功している。とはいえ、他の点では、ほとんどが失敗である。主要な出来事の展開にわずかにしか関係していない、発展させられることのない、取るに足りない問題や人物たちを、この小説は数多く含んでいる。中心的なプロットは、その筋がはっきりせず、散漫である。キングコートがイザベルを拒絶し、そそのかされてエイダ・ウォレンを受け入れたことは、彼自身とエイダ両人の感情の成長に依存している。しかし、こうした登場人物の成長は、唐突で曖昧であり、もっともらしい理由がない。キングコートが最終的にエイダを受け入れることは、明らかに、本屋の店員という慎ましい社会的地位を満足して受け入れることができるようになった彼の精神的成長を反映している、と想像できる。だが、この考えは、ギッシングの努力にもかかわらず、うまく機能していない。この小説の良いところは、ロンドンの商業主義、イザベルの成功、そして彼に疎外感を与える社会生活に、キングコートが反発するところにあらわれている。とはいえ、そのような長所は、数年後に、『イザベル・クラレンドン』は訴える力が弱く再版に値しないと評価することを、ギッシングに思いとどまらせるほどではなかった。

『イザベル・クラレンドン』は失敗だったが、ギッシングが後に取り組むいくつもの試みのリハーサルという意味で、意義をもっていた。この小説を書くことで、貧しい人々が被っている不正を利用する種類の小説と決別することができるかどうか、そして、後の『因襲にとらわれない人々』や『渦』で大いに成功して描くことになる社会階級をとらえることができるかどうか、ということギッシングは試そうとしたのである。『イザベル・クラレンドン』は、条件付きの敗北——つまり、野心的情熱を克服するものとして、慎ましい人生の目標と慎ましい地位を受け入れるという結論——に取り組んだギッシングの最初の試みである。同様な主題は、彼の完結した小説としては最後のものである『ウィル・ウォーバートン』でも扱われている。

### 『人生の夜明け』(1888)

『イザベル・クラレンドン』と同様に、『人生の夜明け』——最初は「エミリ」(“Emily”)という題名だった——もまた、ギッシングにとって社会問題から離れようとする試みだった。というのも、その小説には、ギッシング自身を思わせるような、貧しく真剣な主人公は登場せず、また、情熱的に社会理論を主張したり批判したりするところもないからである。しかし、『イザベル・ク

ランドン』とは異なり、この小説はギッシングに、彼の成熟した才能を試してみる機会と、彼の支持する思想をいくつか示す機会を与えたのだった。そのヒロイン、エミリ・フッド (Emily Hood) は、ジョージ・エリオット、メレディス、ジェイムズらが実行していた卓越した性格分析という点で、ギッシングがある程度の成功を収めた最初の登場人物である。その成功が、『暁の労働者たち』や『無階級の人々』での性格描写を損なっているのと同じ芸術理想主義を通して達成されたことは、興味深い。ギッシングは、初期の小説によく見られるように、芸術的な経験が精神的成長をもたらすと単に主張するのではなく、ある若い女性がそのような主張を現実的な教義として受け入れた場合、彼女の思考にどのような影響を与えるのかを検証しようとしたのである。それは、美とは究極の善であるという信念から出発し、数々の精神的危機を経て、その『美の宗教』が人生の諸問題に対する無知から生まれた幻想にすぎない、ということに行きあたるヒロインの成長をとらえる信憑性のある描写となって結実している。

エミリ・フッドは、イギリス北部の町(ギッシングが生まれたウェイクフィールドがモデルである)出身の、貧しいが教養のある若い女性で、真の意味で知的であり、ヴィクトリア朝において洗礼された女性の性格とみなされた繊細な感受性と道徳的な几帳面さともちあわせている人物である。ある裕福な家庭の田舎の邸宅で、ガヴァネス(女家庭教師)をしているうちに、その家の息子、ウィルフリッド・アセル (Wilfrid Athel) と婚約する。しかし、両親の家を訪れているときに、感情の赴くまま行動するダグワージー (Dagworthy) という、父親の雇い主の命令に従わなければならなくなる。ダグワージーは、彼女の父親が窃盗を働いたことを知り、暴露されなくなかったら彼と結婚しろと彼女を脅すのである。不幸なフッド氏は自殺することで、彼女のジレンマを解決する。エミリは、ある意味では彼女の父親への共感から、またある意味では彼女の精神的な規律から、彼女の恋人ウィルフリッドから去る。長い年月がたち、彼らがすでに若さを失った頃、二人の恋人たちは再び出会い結婚し、物語はハッピー・エンディングで幕を閉じる。

『人生の夜明け』とくらべると、それ以前のギッシングの小説に登場する人物は、作者の操り人形のように見えてくる。その点で、『人生の夜明け』は、ギッシングが、道徳的な問題や精神的な問題を登場人物という媒体を通して表現する技術を獲得した小説と言ってよいだろう。

『人生の夜明け』における登場人物の性格描写で、より単純だが、印象的な例がさらに2つある。まずひとは、エミリの父ジェイムズ・フッドであり、

もうひとり、彼の雇い主であるリチャード・ダグワージーである。ジェイムズ・フッドは、あくせく働く中年の店員で、彼の自尊心は、長年の貧困と、日々のつらい労働のために消え失せている。そして、彼は知らず知らずのうちに罪を犯すことになる。彼は古い帳簿のページの間に 10 ポンド紙幣を見つけるのだが、それを返す暇もなく、使いに出なければならなくなる。列車の中で帽子を失くし、隣町で新しい帽子を買うために、そのお金の一部を使ってしまう。いったん 10 ポンド紙幣が細かい貨幣にくずれてしまうと、彼はさらにその一部を使い続ける。そして、最終的にそのお金を返すつもりがなくなってしまう。フッド氏の短い悲劇的なエピソードでは、プロットと思想との統一にギッシングは成功している。その統一は、『暁の労働者たち』以来ギッシングが試みてきたが、どちらかといえば、失敗してきたものである。フッド氏の物語は、ギッシングが支持している 2 つの考えを表明している。ひとつは、名誉に関するほんの少しの妥協でも、悲劇に結びつくということであり、もうひとつは、貧困が道徳感を破壊するということである。

ギッシングは、道徳の性質をひとつの複雑な総体物とみなし、その一部分の弱体化でさえ、全体の墮落に結びつくと考えていた。彼の小説では、ちょっとした不正直が不道徳へと向かう下り坂の出発点となり、最終的に完全な破滅へと至る場合がしばしばある。最初の失敗がより取るに足らないものであればあるほど、それだけ最終的な悲劇がより印象的なものになるのである。『暁の労働者たち』の中では、画家のグレシャム (Gresham) がヘレン宛ての手紙を盗み見たとき、その小さな犯罪が彼の完全な墮落へ至る始まりであったことを、ギッシングは読者に確信させる。『民衆』でリチャード・ミュウティマー (Richard Mutimer) がエマ・ヴァイン (Emma Vine) との婚約を破棄したことは、どちらかと言えばそれほど重要でない個人的な不誠実だが、それが後に彼が開始する社会主義運動を挫折させ、さらには彼の死をもたらすのである。フッド氏の過ちは、より都合の良いときにお金を返すのを延期したということだけである。だが、彼の物語には、道徳的問題については、一瞬のためらいでさえ、最終的に魂を破滅させることになりかねない、という警告が含まれている。かつてオーエンズ・カレッジから放校された青年が、道徳的性格というものは墮落しやすい、とりわけ貧困に苛まれているときにはそうである、と感じるのはもっともなことである。<sup>5</sup>『人生の夜明け』には、スラムの情景は描かれていないが、貧困と、貧困の破壊的影響は、困窮するフッド家の日常生活の描写に効果的に示されている。その描写は、抑制のきいた、しかし臨場感のある筆致でなされており、ギッシングの初期小

説における貧困のセンセーショナルな表現よりも、はるかに優れたものである。

リチャード・ダグワージーは、彼の性格に対する深い洞察を除いては、メロドラマの悪役といったところだろう。強い意志をもち、手荒い方法を講じる男でありながら、彼には未熟な詩心のようなものがある。実現しそうな激しい野心を満足させる手段として、彼が洗練された女性との結婚を求めずにおれないのは、そうした詩心のためである。ギッシングがダグワージーをエミリと同様に情熱に衝き動かされる人物として巧みに強調しているように、彼は強烈な人間性を示している。しかし、このような洞察が、登場人物たちの特徴を同じ感情的な雰囲気の中で曖昧にしてしまうということにはなっていない。ギッシングはダグワージーの性格をはっきりと区別して示している。彼は最後まで、狡猾で、想像力がなく、改心しない人物である。

【エミリ】—後に「人生の夜明け」と改題される—が1888年1月から「コーンヒル・マガジン」(*Cornhill Magazine*)で連載される、と編集者のジェイムズ・ペイン (James Payn) が1887年11月の初旬に伝えてきた。この小説はペインの手もとで2年以上も保留の状態にあったのである。

### 第3節 再び社会問題へ

#### 『民衆』(1886)

【イザベル・クラレンドン】が校正を経た状態でチャップマン・アンド・ホール社によって検討されている段階で、また、『人生の夜明け』がまだ出版社に送られていなかった段階で、ギッシングは次の小説『民衆』を書き始めた。これまで出版された小説は失敗だったし、草稿の段階の上記2作品もその点では疑わしかったが、ギッシングは1885年後半の手紙で、絶え間ない困難な仕事にしか慰めを見いだせないと述べている。最初の2つの小説で取り扱ったスラムのテーマからギッシングが離れたのはまちがいがいった、というメレディスの意見のために、自分自身の小説に対するギッシングのいつもの不安がさらに高じた。その点で、『民衆』は、ギッシング自身が言うところの「彼自身の専門分野」に再び戻った小説だった。しかし、『民衆』では、『暁の労働者たち』や『無階級の人々』のような、労働者階級への共感の姿を消す運命にあった。というのも、人間の性格について、また貧困と搾取によってどのように人間の性格が影響を受けるかについて、ギッシングの学んだ教訓が今やはっきりとした形をとり、彼は労働者階級の目標と能力に対する辛辣

な諷刺作品を書く準備ができていたからである。

この小説は、リチャード・ミュートイマーという急進的な労働者についての物語なのだが、ミュートイマーは、予期していなかった遺産を突然受け継ぎ、社会主義運動の指導者になり、彼の財産で共同組合経営の工場を設立する。しかし、彼が新たに手に入れた富と権力は、労働者階級生まれゆえの彼の性格の欠点をむしろ浮き彫りにする。シェリーが不道徳の原因とみなした、想像力の欠如から来る欠点である、他の人の感情に対する無感覚のために、彼は婚約していたロンドンの貧しい若い女性を捨て、また、彼と共に働いている労働者につらくあたる。彼は、彼を愛していない上層中産階級出身の女性と結婚し、国会議員選挙に打って出る。彼が遺産相続者でなかったことを記した、失われていた遺書を彼の妻アデラ (Adela) が発見したとき、彼の道徳的危機は頂点に達する。ミュートイマーはその遺書を破棄しようとするのだが、アデラはそれを許そうとしない。結局、遺産は正当な相続者に譲渡され、社会主義の実験は中断し、ミュートイマー夫妻は、ロンドンで裕福とは言えない生活を始める。再び始めた社会主義の改革運動も、彼の同僚が彼を騙していたために挫折する。そして、以前は彼の信奉者であったが、もはや彼を見限った群集から投げられた石によって、彼は命を落とすのである。

『民衆』はあからさまな傾向小説である。りっぱな貧者といえどもまぬがれることのできない性格としてギッシングが考えていた、利己心、狭量、不正直、意志の弱さを、『民衆』はミュートイマーと彼の家族を通して明らかにする。その主題は、貧困が貧しい人々を救いようがないほど墮落させ、社会民主主義が教えようとする自己規律を彼らにとって達成不可能なものにするということである。

この考えほど、ギッシングの小説で何度もあらわれるものはない。なぜ『ネザー・ワールド』のボブ・ヒューイット (Bob Hewett) が贖金造りに走ったかを、ギッシングは次のように説明している。「法律の尊重は、法が守ってくれる何物かを所有していることの結果である。たまたま何も所有しておらず、不幸にも、世俗的なこと以外の教育を受けたことがなければ、おそらく結果は、社会の原理を次のようなあからさまな法則で理解することになるだろう。つまり、捕まらなければどんな手段を使ってでも手に入れろ、ということである」。フリードリッヒ・エンゲルスは、『イギリスにおける労働者階級の状態』において同じ点をより簡潔な言葉で強調して、「何も所有していない人間にとって、所有の神聖さという概念は消え失せている」、と言っている。

『三文文士』のリアドン (Reardon) は彼の妻に、現代の貧困はかつての奴隷制度と同じ影響を人間に与えるものだと述べ、その権威ある意見としてホメロスの詩に言及している。デズレーリは『シビル』で、ウドゲイト (Wodgate) というスラム街について次のように書いている。「その人々が不道徳だというわけではない。なぜなら、不道徳ということは、何か前提があってはじめて言えることだからである。また、彼らが無知であるわけでもない。なぜなら無知は、比較の上での話だからである。むしろ彼らは、動物であり、意識をもたず、精神が空っぽなのだ」。ギッシングが一般公休日の群集や労働者の集会の聴衆を見て感じたのも、このような動物性だった。ギッシングは、それが貧困の結果であり、教育の効果もまた、その動物性をより受け入れられやすい、何か別の不道徳の形態に変えるだけで、それが同様に有害であることに変わりはない、と考えていたのである。

ギッシングは、当時の重要な政治運動に促される形で『民衆』を書いたのだが、そのような運動は、労働者階級のための運動でありながら、労働者階級の生活と性格を知らないように彼には思われた。1880年の段階でイギリスの社会主義は、キリスト教社会主義の失敗に終わった試みによって実行不可能と見なされた理想の単なる延長にすぎなかった。しかし、イギリスの社会主義は1881年に突然活発に動きだし、1885年までには、3つの新しい社会主義の組織が誕生し、本、パンフレット、雑誌を出版し、著名人をメンバーに加え、しばしば集会を開き、国会議員選挙に候補者を送り出すことさえした。

新しい社会主義運動の最初のもは、『暁の労働者たち』で描かれたような急進主義者のクラブの連合である民主連盟 (Democratic Federation) であり、裕福なケンブリッジ大学の卒業生で、マルクスの『資本論』によって社会主義の火をつけられたH・M・ハインドマン (Henry Mayers Hyndman, 1842-1921) によって1881年に設立された。民主連盟は社会民主連盟 (Social Democratic Federation) と名前を変え、労働組合の指導者たちの支持を集め、イギリスの政治運動において活動的な一勢力となり、かつてのチャーチストの勢いと、ヨーロッパ大陸で広がりを見せていた革命運動の視点とを結びつけた。民主連盟の運動は宣伝と煽動を中心とし、多くの要求を政府に向けた。しかし同時に、武装革命や他の方法で劇的に解放がもたらされることをも期待していた。1884年にウィリアム・モリスを含む何人かの反対者が連盟から離脱し、新たに社会主義者同盟 (Socialist League) と呼ばれる組織を結成し、その指導者の中には、マルクスやエンゲルスが含まれていた。この時代における3番目の社会主義の組織は、1884年にジョージ・バーナード・ショーやシド

ニー・ウェップ (Sidney Webb, 1859-47) を含む若い知識人のグループによって結成されたフェビアン協会だった。フェビアン協会は、革命的な社会理論を民主主義的な方法に適用し、過激な社会主義運動よりも、より穏健で信頼されうる方法を採択することで、宣伝的、教育的組織として大きな成功を収めた。

政治集會に登場する社会主義者たちは、彼ら独特の雰囲気をもっていた。そのような集會のいくつかは、『民衆』の中で生き生きと描かれている。『民衆』を書いているときにギッシングは、モリスを見るという目的と、群集の場面の材料を集めるといふ目的のために、ハマスミスでの社会主義者同盟の集會に行っている。『民衆』では、自己批判、献身、宗教的な熱狂といった態度を見せる、演壇でのミュートイマーの振る舞いや、騒々しく抑制できない聴衆の突発的で感情的な反応は、どちらも独自の生命力をもったものとして描かれている。

『民衆』が書き進められていた 1886 年の 2 月に、トラファルガー広場で社会民主連盟の大規模な集會が開かれ、その主催者が群集をペル・メルからハイド・パークへと導こうとしたときに、暴動に発展するという事件が起きた。石が投げられ、窓が割られ、商店が略奪された。一瞬のうちに革命が勃発する寸前にまできたかのように思われた。ギッシングは『民衆』で同様の光景を描いている。

さらに社会主義の多くの影が、『民衆』にはあらわれている。ニュー・ウォンリー (New Wanley) にあるミュートイマーの工場の体制は、ロバート・オーエンの精神と、サン＝シモンのようなフランス理論家の協同組合主義の理念とともに反映している。<sup>6</sup> ミュートイマーの教義と発言は、社会民主主義者の激しく、煽動的な発言から多くを得ているように思われる。彼の運動は、ルードハウス (Roodhouse) という名前の過激主義者の引き起こした分裂によって勢いをそがれるのだが、そのことは社会民主連盟から離脱した指導者たちが社会主義者同盟を結成したことを暗示している。ウィリアム・モリスは、ウェストレイク (Westlake) によって体現されている。ウェストレイクは、教養がある芸術家肌の社会主義者であり、大衆の教育に重点を置くのだが、彼の方法にミュートイマーはしだいに嫌悪をいだくようになる。

基本的に『民衆』は、優れた、しかし典型的な、労働者階級の人間であるミュートイマーによって体現される下層階級の性格を、徹底的に分析するものである。ミュートイマーは彼の革命的な方法に、知性と勤勉と決断力を付与するが、ギッシングは、ミュートイマーの階級の精神的な不毛さを、彼の

家庭の悪趣味な調度と、彼が学ぶただ激しいだけの急進主義の論争術によって明らかにする。プロレタリア階級の典型的な性格は、リチャードと彼の家族が遺産を受け継いだときに露呈する。ミュートイマーの弟は、働くのをやめ、訓練を受けるのを拒絶し、街のごろつきになり、彼の妹は、暖炉の前に 1 日中居すわって、三文小説を読みふける。ミュートイマーは、裕福な人々と食事をする作法を身につけること、彼よりも社会的地位が上の女性を口説くこと、また、社会改革の手のこんだ計画を実行することには成功するが、失われていた遺書の発見という、幾分メロドラマ的な出来事によって、人格の欠点をさらけ出す。ミュートイマーがその遺書を破棄し、正当な遺産相続者から財産を奪おうとしていることを知ったとき、彼の妻アデラは、彼が示した名誉心の欠如は、彼には乗り越えることのできない、彼女との間の階級格差によるものだと悟る。ミュートイマーが列車の中で眠っているとき、彼女は彼の顔を注意深く観察する。「それは、生まれの点から言っても、教育の点から言っても、彼女より完全に下位の人間の顔だった。彼女はずっと、ある階級と別の階級とを分け隔てる、取るに足らない偏見があるだけで、両者の間に本質的な差異などないのだ、と自分自身に言い聞かせてきた。だが、彼女と同等の人間になるためには、この男は別の両親をもち、別の環境で、もう一度生まれてこなければならぬのだ。彼女は貴族階級の末裔であるわけではなかったが、彼女の両親はジェントルマン階級の人間だった。少なくとも 3 世代前まで、彼女の祖先たちには、その階級を名乗る権利があっただろう。それだけでも、彼女とミュートイマー家の人々との間に巨大な溝を築くのに十分ではないか。教育にふさわしい環境が、他のどんな女性にも劣らぬ心と知性の繊細さを彼女に与えていたのである」

このきわめて大きな意味をもつ文章は、労働者階級に対するギッシングの特徴的な態度を反映しているとともに、環境の影響という新しい考え方で、遺伝の影響という古い考え方をめぐっての彼の葛藤をも示している。人の性格を変えるには、単に環境が変わるだけでは十分でない、とギッシングは考えていた。そのことは、ミュートイマーの家族が突然の生活水準の向上で、むしろ崩壊することを見てもよくわかる。3 世代のジェントルマン階級がアデラの性格を生み出したように、環境の影響は長い期間でなければ効果がない。この点でギッシングの見方は、依然としてダーウィン以前のものであり、彼は、遺伝的差異を生み出すには 3 世代では不十分であること、また、アデラが優秀である本当の原因は、じつは環境によるものであることを、はっきりと理解していなかった。

ギッシングは多くの小説で、遺伝の影響と環境の影響の両方を強調している。しかし、ギッシングは、どちらか一方が他方よりも決定的だとは考えなかった。貧しい人々が生活環境の向上によって救済されるのかどうかという問題を、正面から取り上げることはなかった。環境決定論の長い伝統と、1880年代の多くの自由主義的改革者による明確な解答にもかかわらず、その問題はまだ決着がついていなかった。W・H・モロック (William Hurrell Mallock, 1849-1923) のような保守主義者は、「貧民」を他の人々とは別の人種として見るように主張し続けていたし、ギッシングが数年後に読んだ遺伝についての著書を記したT・リボー (Théodule Ribot, 1839-1916) のような科学者でさえ、文化の多くの側面を遺伝の影響として説明していた。リボーは唯物論に基づき、道徳的性格は身体的特徴に依存しており、それゆえ、身体的特徴と同様に遺伝すると主張した。遺伝の影響を信じることは、階級差の存在を信じることに繋がるとリボーは指摘した。この指摘に従えば、階級差は人間性に深く根づいていて変えることが難しいというギッシングの確信もまた、遺伝を重視する彼の態度と相関して生じた当然の結果だと言えるだろう。

19世紀の半ばまで、ある人がどの階級に属しているかは、外面的な特徴からはっきりと認識できた。労働者階級の人間を中産階級の人間と見誤るということは、通常ありえないことだった。だが、下層階級出身者が服装、マナー、言葉づかい、教育の点での不利を克服することは、19世紀の後半になると容易になった。それにもかかわらず、ギッシングは、もちまへの保守主義的性格から、日常生活のちょっとした振る舞いが、下層階級の人々と他の階級の人々との決定的な差異につながっていると見なしていた。ミューティマーが初めて中産階級のウォルサム (Waltham) 家と食事するとき、彼がテーブルマナーを意識しすぎるところに、ギッシングは彼の平民的文化背景の明確な証拠を提示している。

マナーと道徳—この2つはギッシングにとってしっかりと結びついたものだった。ギッシングは、中産階級のマナーが、しばしば破られるようになってきてはいても、依然として存在していた彼らの道徳的規律に対応していると考えていたのである。それに対して、貧しい人々の中では、彼らの騒々しい、残酷で、思いやりのない振る舞いにあらわれているように、無秩序が支配している。ディケンズを喜ばせた、休日における彼らの節度のない乱痴気騒ぎは、ギッシングをひどく落胆させるものだった。彼らの食事、テーブルマナー、共同食堂、低俗なユーモアと嘲笑は、ギッシングの顔を背けさせる

ものだった。

こうしたギッシングの俗物的な見方は、「完全に」客観的であるとは言えないかもしれないが、ギッシングの揺るがぬ確信と論理的に結びついた一側面だった。貧しい人々の生活は、彼らの生活を形づくる産業主義が促す物質主義と競争主義とを反映している。彼らの社会は、無慈悲で、残酷で、良心を省みない人間たちが勝ち残る社会であり、進化論に従う形で、そのような人間たちが支配するようになる社会である。しかも、貧しい人々の生活は、シェリーが想像力を成長させると見なした芸術と美を体験する機会をまったく与えず、あるいは、ペーターが言うような、永遠の真理を知ることによって倫理的な基準が体得される理想的な世界へ入っていく機会を与えることもない。ギッシングは次のように主張した。「労働者階級の人々の致命的な欠点は、想像力の欠如である。想像力は、誰にとっても、生まれた環境にかかわらず、自然によって与えられる能力なのかもしれないが、実情から言えば、それは知性の鍛錬にかなり依存している」

アデラは当時の対立しあう思想の潮流の中に身を置き、さまざまな影響と向き合い、しだいに彼女自身の哲学を獲得していく。彼女の成長は、それぞれの段階で、集中的に分析されている。ミュートイマーが初めて彼女に出会ったとき、彼女は母親の言いなりで、ピューリタンの宗教心をもつ少女でしかなかった。最初はミュートイマーの急進的な思想に無関心だったが、妻としての義務から、彼女自身も社会主義者になる。彼女の新しい主義との関連で取り組んだ学習が、未熟さから彼女を脱却させるきっかけとなる。しかし、現行の社会主義は彼女を失望させるものであり、彼女は社会主義が自分には支持できない人間性の理論に基づいていることを知る。その後子供を失い、ミュートイマーの冷酷さを知り、社会主義への信頼を失い、彼女は無力感に打ちひしがれる。

しかし、アデラは最終的に、ステラ・ウェストレイク (Stella Westlake) の影響から、美を鑑賞することで精神の安らぎを得る。そのような活動が、彼女にとって、ミュートイマーの社会理論よりもはるかに価値のあるものになるのである。アデラは読書とステラとの交友を楽しみ、社会主義を棄て、自己達成の生活を選び、後者の中に永続する満足感を見いだすのである。

かつてギッシングは、芸術のプロパガンダとしての力を重視していたが、アデラ・ミュートイマーの物語は、むしろ、貧困や産業主義によって破壊されてしまう能力を直接強化するところに、芸術、文化、内省の価値がある、と彼が考えるようになったことを示している。真理と美を内省することに

よって体得される精神の成長から、世界が必要としている救済がもたらされるかもしれない。とすれば、この自己教育は、現実の世界とその利害から身を引くことによってのみ可能になるだろう、とギッシングは考えるようになったのである。

『民衆』で示された、社会活動に対するこうした不信は、ギッシングがモリスを否定するようになることに通じている。彼にとって、モリスは、より悪い方法のためにより良い方法を犠牲にしているように思われたのである。モリスは作家として、また装飾家として有名だったが、1883年に社会民主連盟に加入して以来は、活動的な社会主義者であった。ギッシングは彼の弟に宛てた手紙で、いらだちをまじえてこう書いている。「どうしてモリスは、木陰で詩を書いていることができないのだろう」

社会問題に対するアデラ・ミュートイマーの当惑を解決するものとして、芸術と読書の生活をギッシングが提示したとき、彼は、当時広く受け入れられていた考えのひとつを具体化して示していた。芸術活動と内省が道徳的能力を強化するという説は、古くプラトン時代にまでさかのぼるものだが、社会に大きな影響力をもっていた、ギッシングの同時代人の幾人かは、その考えがとりわけ彼らの時代の問題に有効であると見なしていた。それは、ラスキンやモリスの思想の根幹をなす考えであり、ペーターの哲学の中にも、そうした考えが見いだせる。利害関係から離れた自己教育は、社会改革の最善の方法であるという、その理論にもっとも正確に焦点を当てたのは、おそらくアーノルドの『教養と無秩序』(*Culture and Anarchy*, 1869)であろう。アーノルドは、社会が真に進歩するためには、精神的成長が不可欠であると主張した。社会改革というものは、政治的狂信主義や、ある階級の利益を増大させること、あるいは自由の拡大だけではもたらされず、国民の幸福と伝統的な精神とを偏ることなく深く理解することによってのみもたらされる、と彼は論じた。時代の悪からの救済は、「文化」を通して達成される、とアーノルドは主張したのだが、彼によれば「文化」とは、理性と神の意志とを広めようとする欲望であり、完璧さの追求として定義された。

ギッシングは、彼が取り組んだギリシャ語、音楽、ダンテ、スペイン語などの研究から、知識の追求が人に生気を吹き込む力をもっていることを学んだのだ。そのような活動は、社会理論とは異なり、社会を構成する人間という材料そのものを改善することによって、社会のより実際の改善をもたらすのである。

しかし、ギッシングが精神の生活に高い価値を認めたことは、もうひとつ

重要な政治上の考えを含んでいる。そうした精神生活は、彼自身の経験から言って、経済的に余裕がなければ不可能であり、それゆえギッシングは、当時の唯物論者が富について見なす典型的な見解に完全に同意していた。数シリングあるかないかで、1日が空腹の日になるか、心地よく本を読んだり書いたりする日になるかに分かれてしまう貧しい生活の中で、ギッシングは、所有することと、しないこととの間にある決定的な違いを、身をもって知ったのだった。「金を財布に貯めろ、そしてもう一度、金を財布に貯めろ。というのは、貨幣を持たないということは、人間という特権を放棄することであり、貧しさに喘ぐことは、魂を殺すことだからである」(『人生の夜明け』、第5章)

このような見解ゆえにギッシングは、社会闘争の中では中産階級の側に立つのだが、それは、経済的に余裕のある環境でしか、知性と精神の可能性が達成されないからである。

しかし、ギッシングは、彼自身が精力的に抗議してきた社会不正や悪事によって、そうした中産階級の不自由のない生活が可能になっていることにもはっきりと気づいていた。彼は、イギリスの産業文明が多くの人々の貧困によって達成されていることを知っていた。文化や美への愛は満たされなければならないだろう。だが、ギッシングは、ミュートイマーに演説の中で、中産階級の余暇が貧しい人々の苦痛でゆがんだ肉体から絞りあげられたものだ、とはっきりと説明させる。芸術と知識への愛と、社会の正義のために彼の道徳が要求するものだが、彼の生きている社会では両立しないという事実、ギッシングは向き合わされることになるのである。前者は、後者を犠牲にしなければ、満たされることがない。アデラ・ミュートイマーが美を追求したからといって、エマ・ヴァインと彼女の家族の運命である貧困、過労、病気、そして死が軽減されるわけではない。いや、それどころか、彼らの苦悩は、無視するにはあまりにも切実なものである。『民衆』では、こうした2つの方向性が、どちらか片方をより決定的にすることなく、効果的に描かれている。

『イザベル・クラレンドン』が出版される直前であり、同一作者の出版が重なることを避けるために、『民衆』は匿名で出版された。匿名で出版されたために、また、社会主義者の騒動によって広く注目を集めていた問題を扱ったために、多くの人々の関心を集めた。数年後にチャールズ・ブースが、『ロンドン市民の生活と労働』の中で、貧しい人々の生活の信頼できる描写を提供するものとして、この小説に言及している。

## 『サーザ』(1887)

『サーザ』は、労働者階級の生活を描いた、新たな小説として書き始められた。ギッシングは信憑性のある描写を求めて、ロンドン南部の労働者階級の地域であるランベスで、長い時間をかけて小説の材料を集めていた。彼は1886年の8月の一般公休日に、小説の執筆を中断し、歓楽に溺れる人々を観察しに行っている。ゾラと同様にギッシングは、現実の正確な認識が小説を書くための必要条件だと考えていたのである。言うまでもなく、ゾラは当時、小説の分野で報告書的な正確さを代表する作家だった。ギッシングは、『民衆』での描写は表面的で正確ではないと考えていたので、『サーザ』を「ロンドンにおける労働者階級の生活の精神そのものをとらえた小説」にしようと思ったのだ。

『サーザ』は、ギッシングの小説の中で、貧しい人々にもっとも同情的な小説なのだが、『民衆』の反大衆的な感情を穏やかな言葉で単に繰り返したものでもある。『民衆』と同様に、この小説でも、幅広く支持されている社会改革の理論が吟味され、批判される。プロットは複雑でぎこちないもので、社会的関心と恋物語とが強引に結びつけられる。ウォルター・エグレモント(Walter Egremont)という若い裕福な理想主義者が、社会改革にとっては生きた材料である労働者階級の人々を教育しようと決意する。エグレモントは、最下層の人々を当面の間は救いようがないと判断し、より裕福で教育のある労働者たちに関心を向ける。彼はランベスで数人の生徒を集め、労働者階級の生活と労働が促す物質主義に対する解毒剤として、イギリス文学の講義を行なう。その結果は、ギルバート・グレイル(Gilbert Grail)という本好きで労働者の反応を除いては、彼を失望させるものだった。

エグレモントの教育の試みは、グレイルの婚約者である若く美しい女性労働者、サーザ・トレント(Thyrza Trent)と彼自身とが相思相愛の恋愛に陥ってしまうことによって妨げられる。エグレモントは、サーザへの愛に抵抗できず、彼女とグレイルが結婚するまでイギリスを離れようとする。しかし、エグレモントが発案すると、サーザはグレイルとの結婚を避けるために、家出をしてしまうのである。オーモンド夫人(Mrs Ormonde)という慈善事業に関心のある裕福な女性がサーザを発見し、彼女の家を迎え入れる。夫人は、サーザがエグレモントにふさわしい女性になるまでという条件で、エグレモントがサーザと会うことを禁止する。サーザは、オーモンド夫人とエグレモントとの約束を盗み聞き、エグレモントが帰ってくるのを信じて待つことに

し、その間、レディにふさわしい訓練と教育を受ける。だが、エグレメントが2年後に帰ってきたとき、オーモンド夫人は、サーザがあまりにも洗練され、前とは反対の意味で彼にはふさわしくない女性になってしまったので、彼との結婚は不可能だ、と彼を説得する。この失望のためにサーザは死に、最後にエグレメントは、彼と同じ階級の女性と結婚する。

ギッシングがランベスの通りを注意深く観察して歩き回った成果は、サーザが住んでいる町、労働者階級の人々が登場する多くの場面、あるいは小説の副次的なプロットにからんでくる登場人物たちの描写にあらわれている。

「サーザ」は「民衆」と同様に、はっきりとした社会的な主題をもっている。それは大衆教育に対する辛辣な批判である。環境の影響という、ロックやオーエンの思想、あるいは、人間は完璧なものに成りうるという理想は、ギッシングの時代には、教育を貧しい人々にまで広げていこうとする考え方に実際にあらわれていた。義務教育を実施する学務委員会 (School Board) 制度は、1870年から1880年まで、男子の普通教育を一般化し、私設学校では不十分なところを補おうとする議会の法案によって成立したものだ。1880年までには、ありとあらゆる種類の思想の持ち主も、将来を担う子供たちに教育が必要であるという点では、見解の一致に達しているようであった。

ギッシングは、彼の学問への愛にもかかわらず、社会改革の手段としては、教育を信用していなかった。「暁の労働者たち」では、アーサーが彼の妻に必死で読み書きを教えようとするが、その貧しい女性は、彼女自身の教育に必要な自己規律を身につけることができないのである。アーサーは、彼の方では彼女を変えることができないと認めなければならなかった。大衆教育という政府の試みも同様な失敗にいきつくだろう、とギッシングは感じていた。そういった教育は商業主義の精神によって培われており、その対象が可能性のない人間であるという点で、貧しい人々をより能率のよい奴隷に変えるだけであり、俗物性を上の階級にまで押し上げ、結局人々の感性を低下させ、多くの点で文明の墮落をひきおこすだけだろう。そのような結果は、「三文文士」や「女王即位50年祭の年に」でも描かれることになる。

貧しい人々に文学を通して美を認識する方法を教え、そうすることで物質主義的精神から彼らを引き離そうとするエグレメントの試みは、労働者大学 (Working Men's College) での大人の教育というF・D・モーリスの先駆的な試みに批判的に言及したものだと思われる。<sup>7</sup> エグレメントの計画は失敗し、彼は最終的に、それが理想主義者の無意味なジェスチャーでしかなかったと

認めるのである。

#### 第4節 新たな試み——中産階級の分析と中篇小説への挑戦

##### 『因襲にとらわれない人々』(1890)

ギッシングは、1888年秋にヨーロッパ大陸へ出発する前から、彼のおきまりのテーマにすでに食傷気味であり、イタリア旅行での体験は、彼がスラムを描く陰鬱な詩人であり続けることを不可能にした。

イギリスに帰国後の最初の小説である『因襲にとらわれない人々』では、ギッシングが訪れたナポリやその近郊の場面が部分的に使われている。しかし、ギッシングはこの小説を書くことに困難を感じた。というのは、ひとつには、しばらく小説を書くことを中断していたからであり、またひとつには、かつて『イザベル・クラレンドン』がそうであったように、『因襲にとらわれない人々』がそれまでの小説の主題から離れるものであったからである。事実、『因襲にとらわれない人々』は、彼の小説家としての仕事の中で、新しい段階の始まりであった。ギッシングは、中産階級の生活というセンセーショナルではない題材に自分の関心をかきたて、その関心を維持するという、これまで体験したことのない努力をしなければならなかったのである。

【ネザー・ワールド】までの小説では、ギッシングの文明批判は、文明が貧しい人々を搾取していることに直接向けられていた。しかし、『因襲にとらわれない人々』では、貧困というテーマを棄て、近代産業社会での精神状況という、より大きな主題にギッシングは向かっていったのである。

とはいえ、中産階級に対するギッシングの批判は、貧困を扱った彼の小説にあらわれていた社会についての考え方が、論理的に発展したものである。貧困に対する恐怖は、貧困が人間の才能を破壊してしまうところにあったが、ギッシングは今や、現代文明の競争的精神が——その作用はより間接的かもしれないが——あらゆる階級で同じ結果を生みだしていることに目を向けたのだ。

イギリスの中産階級は、産業革命期にしだいに権力を獲得し、1832年の選挙法改正で政治的な権利を勝ち取り、急速にイギリス人の生活のあらゆる領域で古い土地所有貴族階級にとってかわり、新たな指導者となっていった。ヴィクトリア朝の商人階級あるいは製造業階級の人々に典型的な態度の多くは、安定を求めようとするがゆえに生まれていると説明できるだろう。喧騒から離れた、裕福なヴィクトリア朝の人々の安定した家庭、あるいは彼らの

住まいの快適さは、彼らが体現している生活を脅かすようなことが起こってほしくないという願いのあらわれであるように思われる。彼らは、マナー、服装、意見の画一性を強要し、既存の宗教的信条に頑迷に執着し、あらゆる外来的なものや新しいものを、自分たちのほうが優れているのだという確固たる信念で見下した。しかし、どんな状況でも汚れなき純潔という外観を維持しなければならない必要から、欺瞞という習慣がもたらされ、習慣化した自己欺瞞は、多くの人々に罪の意識をもたらしした。

『因襲にとらわれない人々』が書かれた 19 世紀末になるにしたがって——確かにブルジョア社会の根底にある心性と経済的事実は本質的に変化しなかったものの——世紀半ばの厳格なピューリタニズムへの反発が徐々に進行していった。ヴィクトリア朝中期の事業家は、自分自身の独立性と儉約を誇ったが、その子孫である 1880 年代の人々は、自分自身の富を見せびらかすことをより好んだ。祈禱や、教会に行くこと、また道徳的な感情によって啓蒙を求めた人々の後の世代は、むしろ、絵画展、音楽会、劇場に行くことを好み、あるいは冒険や新発見を求めて、あまり評判の良くない趣味に向かったのである。ピューリタニズムが衰退し、新しい中産階級は、古い貴族階級を彼らの規範とするようになったのだった。

『因襲にとらわれない人々』の主人公は、ロス・マラード (Ross Mallard) という憂鬱な雰囲気、孤独な画家である。彼はギッシングの分身であり、ギッシングの意見、気性、性癖を共有している。寡黙で勤勉であり、極端なことを嫌い、感受性が強く、すぐに動揺し、芸術がもつ表現の自由に細心の注意をはらっているが、芸術の社会的効能については、誇大妄想的な理論を拒絶する。こうした特徴は、ギッシングの態度そのものであり、ギッシングの口調そのものである。マラードは革新的なものを冗談半分に疑い、同時に中産階級の実利主義には激しく反対する。

『因襲にとらわれない人々』は、他のギッシングの小説には見られない興味深い構図の対称を見せている。物語中の主要な人物たちは、2つのグループに分けられ、その中心に、どちらのグループにも属さないマラードが位置している。ひとつのグループは「因襲にとらわれない人々」で、彼らは公然と慣習に挑戦し、芸術と文化についての気取った、不毛の考えを流布させる。その中心は、マラードの死んだ年上の友人の娘であり、彼の被後見人となっているセシリー・ドーラン (Cecily Doran) である。セシリーの教育は、レッシング夫人 (Mrs Lessingham) に任せられ、夫人は自由と啓蒙の精神で彼女を教育するのだが、そのような教育は、女の子たちが純真であるためには無知で

あるほうが好ましいと思っていた社会にとっては、十分に革新的であった。

しかし、セシリーは教育が与えてくれた知識に対して何の信念ももたず、またそれを理解せず、単にそれを合言葉や流行飾りとしてしか利用しない。彼女は、芸術家が自由であり、「人類の中の王子」であると言うが、職業芸術家であり、懷疑と苦難につきまといわれているマラードは、彼女が何もわかっていないことに愕然とする。彼女の恋人のルーベン・エルガー (Rueben Elgar) もまた、同様な軽薄さをさらけだし、実際の職業ではなく作家の道を選ぶのだが、常に何を書いたらよいかわからない始末である。セシリーの友人であるデニア (Denyer) 家の知性の乏しい少女たちは、自らを文化の擁護者と称してはいる。しかし、マデライン・デニア (Madeline Denyer) は、画家である自分の婚約者が生活費を稼ぐことができないとわかると、絵を書くなどという贅沢をしたいならば、金を稼ぐのが先だと彼に助言する。

こうした素人の芸術家たちと対比されているのが非国教徒のグループで、彼らは芸術や良心の自由に敵意を抱く。このグループの中心的人物は、ルーベン・エルガーの妹で、未亡人になったばかりの、厳しい福音教会派の教育を受けた若い女性ミリアム・バスク (Miriam Baske) である。自分自身の楽しみのために絵を描くというマラードの告白を、彼女は罪深い快樂主義としか認めず、セシリーが日曜日にピアノを弾くことに対しても、いらだちを隠せない。

ミリアムの友人であるブラッドショー夫妻 (the Bradshaws) は、年取った中産階級の偏屈さを滑稽に示す好例である。彼らは島国根性まるだいで、イタリアの未知の習慣を理解しないどころか、それをある種の精神病院と決めつける。博物館の裸の彫像は、ブラッドショー氏を驚愕させ、彼の妻を憤慨させる。マラードの友人スペンス (Spence) によれば、このような上品気取りは、彼らの欺瞞的な文化にとっては不可欠の要素なのである。

この2つのグループの登場人物たちは、本質的に非芸術的な時代が芸術に対して見せる2つの態度を示している。そして、マラードは本物の芸術家として彼らの中間に位置し、どちらの極端にも属さない。この対照は、さらに、二人の主要な女性登場人物の、互いに対照的な成長にも受け継がれている。因襲にとらわれないセシリーが、彼女の現代風の主義に従い、結局悲劇と不幸に行き着くとすれば、無知のミリアムは、彼女の小教区的偏狭さから逃れるすべを学び、自ら進んでさまざまな体験をし、マラードと恋をし、結婚する。

小説の冒頭では、セシリーが洗練された人物であるのと反対に、ミリアム

は頑迷に慣習にしがみついているのだが、ミリアムはセシリーとは対照的な成長を見せる。マラードとの出会い、芸術について彼と話したこと、そしてダンテを読んだことが、福音教会派の信条の不毛さを知る最初のきっかけとなる。彼女はイタリアの文化に心を開き、マラードと共にシステイナ礼拝堂(Sistine Chapel)やバチカン(Vatican)宮殿を訪れた後では、教会に対する以前の熱狂がなんの価値ももたないことに気づくのである。

『因襲にとらわれない人々』は、ギッシングが一時的に、個人的な怒りから逃れることができた時期の作品である。彼の激しく、糾弾するような以前のトーンはどこにも見あたらない。抗議の口調さえも抑制されたものになっている。そういった口調にかわって、タイトルに示されているような、都会風のさりげないアイロニーがあらわれている。そして、社会の法則のために罪のない犠牲者となってしまふ、セシリーやマデライン・デニアのような人々への共感が、しばしば説得力をもって示される。

### 『デンジル・クウォリア』(1892)

1891年9月26日、ギッシングは出版社のほうから話をもちかけられるという前例のない体験をした。ギッシングが一卷本形式の小説を執筆中であるという話を新しい出版社ロレンス・アンド・ブリンが聞きつけ、1冊6シリングの価格で出版したい、と申し込んできたのである。

ギッシングが『デンジル・クウォリア』のような中篇小説、あるいは1892年以後数多く書くことになる短篇小説に転向したのには、2つの理由があった。ひとつには、それが手っ取り早く金を稼ぐ方法だったということである。そして、もうひとつには、三巻本形式が歴史の舞台から消え去ろうとしていたということである。登場人物の伝記ではなく、ひとつの連続する出来事を提示し、また、ある考えを長々と分析するのではなく、単に提示するという「ドラマティックな」方法を採用する新しい試みに賛成している、とギッシングは1885年にアルジェノンに宛てた手紙で述べている。1891年にアルジェノンに宛てた手紙でも、ギッシングは小説作法の教訓のひとつとして、次のように書いている。「小説家が分析から遠ざかるほど、作品はよいものになり、読者に受け入れられる、と僕は確信している。登場人物や動機の分析は、読者にまかせればよいのであり、作者は単に事実と出来事を、会話と情景を示せばよい」

『デンジル・クウォリア』の主人公は、強い意志をもった、精力的な行動型の人物で、ポルタラム(Polterham)という地方の町の自由党候補として政治

の世界に入る。候補者選で彼が打ち負かしたのに、彼と友好的な関係にあると思われるユースタス・グラザード (Eustace Glazzard) というライバルに、彼は自分の普通ではない結婚の話、つまり彼の結婚は、本当は結婚ではないということを打ち明ける。彼は、現在彼の妻となっているリリアン (Lilian) に、彼女がスウェーデンでガヴァネスをしているときに会った。そして、彼は2度のプロポーズの後に、彼女がすでに結婚していることを知ったのだった。とはいえ、それは法律上の結婚にすぎなかった。というのも、彼女の夫は、結婚式直後に窃盗の罪で逮捕され、彼女とは実際に生活していなかったからである。この事実を知った後、どのようにリリアンを説得して、ロンドンで一緒に暮らすようになったかを、クウォリアはグラザードに打ち明け、さらにこれからパリに行き、そこで結婚したかのように装うつもりだと打ち明ける。

議会在解散し、次の選挙が近づくと、クウォリアは精力的に選挙キャンペーンを開始する。そのときグラザードは、クウォリアの評価が高まっているのに幾分嫉妬し、リリアンの失踪していた夫を探しだすのに成功する。最初は特に目的もなくリリアンの夫に会いに行ったのだが、やがて自分の妻を取り戻すという目的で選挙直前にポルタラムに彼を出現させ、クウォリアの選挙戦を妨害してやろうと計画する。リリアンの夫は彼女と出会い、彼のところに帰ってくるように要求する。そして、このことが意志の弱いリリアンを投身自殺へと追い込むのである。グラザードが自分の策略を遠回しに告白し、クウォリアもまた悲嘆に暮れて、自分が破った社会の掟を守る必要性を悟ったところで、この小説は幕を閉じる。

『デンジル・クウォリア』は、ギッシングがアルジェノンに語った言葉によれば、「慣習を守ることを強く弁護する」作品だそうである。しかし、ギッシングが本心でそのように語ったと考えるのは、まちがいであろう。というのも、数年後、小説の登場人物が直面するのとまったく同一の状況にギッシング自身が陥ったとき、彼もまた「慣習」を破るからである。ギッシングが彼の以前の結婚のために、ガブリエル・フルリと結婚できなかったときに、彼は『デンジル・クウォリア』が警告を発する方向に進んだ。彼は彼女と結婚しているふりをし、夫と妻として生活を始めたのである。それゆえ、『デンジル・クウォリア』の教訓をギッシング自身の考えであると想定すること、つまり、その教訓を彼自身が慣習を受け入れた証拠とみなすことは、できないだろう。

『デンジル・クウォリア』は、ギッシングが初めて試みた短い形式の小説と

しては、生き生きと描かれており、テンポがよい。しかし、その構造上の難点は、彼が新しい形式にまだ慣れていないことを示している。

### 『女王即位 50 年祭の年に』(1894)

1893年9月12日にギッシングは、彼の新しい小説「ミス・ロード」(“Miss Lord”)を書き始めた。その小説は順調に進み、1894年4月には完成し、『女王即位 50 年祭の年に』というタイトルに改められた。

『女王即位 50 年祭の年に』は、産業社会における結婚の問題と価値観の崩壊についてのまとまりのない物語で、明確に関連づけられていない登場人物たちの間で頻繁に場面が移動し、物語の関心が多くの領域に広がってしまっている小説である。その中心的なプロットは、ナンシー・ロード (Nancy Lord) とライオネル・タラント (Lionel Tarrant) という二人の若い男女の物語で、二人はやむをえずにした結婚を自分たちの自立に干渉するものと見なすのである。ナンシーは彼女の父親から遺産を受け取るために、自分の結婚を隠さなければならず、タラントとの間にできた子供を世間から隠して養育する。彼女は自活し、彼女を無視するタラントの態度を、希望を棄てることなく耐え忍ぶ。一方タラントは、自由な独身生活を愛していたので、理想的な結婚生活は別居生活だと信じこむ。しかし同時に、ナンシーが彼に向ける愛情と、彼女の評判を気にしないではいられない。最終的にこの頑固な二人は、お互いの気性の違いという障害を乗り越え、多かれ少なかれ慣習的な結婚生活に落ち着く。

『女王即位 50 年祭の年に』は、独自の特徴をもっていないという欠点と、主要な登場人物の成長がしっかりととらえられていないという欠点をもっているが、逆に脇役の登場人物たちがこの作品では異常なほどにきわだっている。彼らは、中心的なプロットにはわずかにしか関係しないが、この小説の中心的なテーマを繰り返し述べ、強調するものとして重要である。例えば、ナンシー・ロードのまわりには、女性の地位の変化にもなって生じてきた問題によって、さまざまな点で困難に直面している人物たちが登場する。女性の教育という改革の悲惨な結果は、フレンチ姉妹のうちにあらわれている。成り上がりものの彼女たちは、見せかけの学問や、流行のファッションを身につけても、ギッシングの小説に登場するスラム出身の女性に特徴的な性格である、攻撃的な利己主義を隠すことができない。

『女王即位 50 年祭の年に』のもうひとつの関心は、大衆教育と大量生産によって新たな力を得た下層階級が社会全体に及ぼす影響に向けられている。

俗物的な人間のあさましい物質的向上心は、不当な方法で下層階級からのし上がりとうとする、ナンシーの求婚者であるラックワース・クルー (Luckworth Crewe) にあらわれている。彼は物質的価値しか認めようとせず、道徳的あるいは精神的な信条などまったく気にしない。ギッシングの見方では、無限の破壊をもたらしうる人間である。

しかし、物質主義的な意味での進歩を迷信的に信じこんでいる、もっともたちの悪い人物は、サミュエル・バームビー (Samuel Barmby) である。バームビーの家庭は、中産階級の生活に起こりつつあった変化の縮図である。彼らは娯楽や、あるいは文化でさえ、たしなむことができるのだが、彼らにとっては、彼らの祖先がそうであったように、金が唯一のリアリティをもつものであり、文明は何よりもまず生産の問題なのである。ギッシングが商業と結びつける強欲さと不道徳は、何も知らない女性たちを騙して儲けようとする、ベアトリス・フレンチ (Beatrice French) の洋服店の策略のうちにあらわれている。ベアトリスはラックワース・クルーと共謀して、ブルジョア階級の俗物的な儉約家の女性たちを騙し、目くらむばかりの経済的成功を収めるのである。ギッシングはそこに、道徳感の麻痺した物質主義社会が掲げる理想の典型を見る。

『女王即位 50 年祭の年に』の中で、生き生きとした、あるいは、力強い印象を与える部分があるとすれば、それはほとんどすべてが、俗物的中産階級に対するギッシングの憎悪の産物である。ギッシングは、短篇小説を書いた経験から、簡潔な描写を心がけるようになったと思われる。そのためか、『女王即位 50 年祭の年に』には、登場人物の性格づけや描写に部分的に優れたところがあるが、他のギッシングの小説と異なり、作品全体の内容が弱い。プロットは不必要に複雑であり、わざとらしく、多くの不自然な部分を含んでいる。

### 『イヴの身代金』(1895)

『イヴの身代金』は、ギッシングが 25 日間で書きあげ、1894 年の 6 月 29 日に完成した小説であり、おもに恋愛と性格描写の物語である。モーリス・ヒリアド (Maurice Hilliard) という下層階級出身の若い男性が、予期せぬ財産を受け継ぎ、イヴ・メイドリー (Eve Madeley) という彼と同じ町の、労働者階級出身の若い女性への執拗な恋心を実らせようとする。イヴがある既婚男性と謎めいた不幸な関係をもっているにもかかわらず、ヒリアドは彼女に迫り、彼女が経済的に困窮しているのにつけこんで、彼女との交際を金で買

う。ヒリアドは彼女のつれない態度に辛抱強く耐えながら、彼女が自分に感じている恩義のために、自分を愛することができないのだ、と自分自身に言い聞かす。だが、やがて彼は彼女が他の男性に好意をいただいていることに気づき、彼女はその男性と結婚する。二人が後に出会ったとき、イヴは身代金について二重の意味でヒリアドに感謝する。ひとつは、彼が彼女に与えたお金であり、そのお金で、彼女は自分の恋人を救うことができたのである。もうひとつは、彼自身を受け入れるようにヒリアドが彼女に強制しなかったことである。ヒリアドは、その2つの犠牲のおかげで、イヴが本当のイギリス的貴婦人になり、プロレタリア階級の欠点を克服できたので、それも無駄ではなかったと思う。しかし、ギッシングがベルツに語ったところによれば、小説の本当の真意は、イヴがヒリアドの犠牲に値しない女性である、ということだった。この小説は、ギッシングらしからぬ巧みさを見せている。しかし、登場人物に対する説明を意図的に避けたために、ギッシングの小説に多く見られる、プロットを損なう偶然性と動機づけの弱さが、ここでは他の小説以上にはっきりとあらわれている。

#### 『下宿人』(1895)

『下宿人』は、幾度も書き出しでつまずいた後に、1895年6月の2週間で書き上げられた。それは、ギッシングが骨折って試みたコメディイの中では最良のものであり、下層中流階級出身の若い女性が、郊外の家庭に下宿することによって、ひとつ上の階級にはい上がろうとする物語である。しかし、彼女自身が属している社会階層の振る舞いは、彼女にしっかりとしみこんでいて、矯正できないものである。彼女は、新しい環境によって利益を得るのではなく、むしろ落ち着きがなくなり、短気になり、迷惑な客を連れこんで、家庭を混乱させ、最後は居間で火事を引き起こす。彼女は、ずっと彼女に言い寄っていた元気のよい若い男性と結婚し、自分本来の階級へと帰っていく。そして、それまで彼女を受け入れていた家庭も、やれやれと思うのである。

#### 『都会のセールスマン』(1898)

ギッシングは1897年6月8日に、喜劇的な中篇小説『都会のセールスマン』を書き始めた。この小説は、ギッシングがベルツに語ったところによれば、明らかに金稼ぎのために書かれた。ギッシングはこの小説のために自分の才能を傾けることをほとんどしなかった。ポリー・スパークス(Polly

Sparkes) という元気のよい、若い女性が金持ちの叔父を探すという筋の話であり、下宿生活を陽気に、とはいえやや見下したように表現している点が、特徴といえば特徴になっている。しかし、まったくギッシングの小説らしくない小説である。

### 『命の冠』(1899)

1899年1月に完成された『命の冠』は、本当の意味での恋愛事件がない恋愛小説である。主人公ピアズ・オトウェイ (Piers Otway) は、商店の窓に飾られた理想的な女性の写真を崇拜するようになり、それが彼のうちに、彼を悩ますもやもやとした野心をかきたてる。アイリーン・ダーウェント (Irene Derwent) という若い女性に恋したときに、彼が感じたのも、同様のさらに強い感情だった。つまり実際には、彼はアイリーン自身に恋したというよりは、彼女のマナーや、洗練されたところ、彼女の社会的地位に魅惑されたのである。この完全に社会的な情熱は、ひとつの社交的な失敗のために、一時的な終局をむかえることになる。ある夜会に少し酔っ払って、無作法な友人たちを連れてきたことをアイリーンに咎められ、ピアズは公務員になる希望を棄てる。彼はイギリスの輸入会社に就職し、ロシアに行く。そして数年後、成長したオトウェイはイギリスに戻って、アイリーンを自分のものにしたのである。

ギッシングが恋愛小説を書くことができなかったのは、おそらく彼と女性との関係がいつでも恋愛とは別の関係でしかなかったという事実のためだろう。彼は洗練された知的な女性を、手の届かぬところから熱烈に賛美することができた一方で、彼が尊敬しない女性を、性的欲求を満たすための道具にすることもできた。ガブリエルと出会うまでは、ギッシングは女性との間に、そうした関係以外の関係を取り結ぶことができなかったようである。『命の冠』の恋人たちは、自分たちに共通のロシアの言葉と文化への興味によって結ばれ、幸せな結末をむかえる。見たところ、ギッシングはそれ以上に深い動機づけを考えていなかったようである。何より悪いことには、オトウェイの「情熱」“passion”をきわめて真剣に取り扱ったので、H・G・ウェルズが意地悪く指摘しているように、それが結局「しゃちこぼった愛」“love—in a frock coat”にしかならなかったことに、ギッシングは気づいていなかった。

気の抜けた恋愛小説という側面にもかかわらず、『命の冠』はギッシングの平和主義の表明として興味深い。1895年からポーア戦争勃発の1899年まで、帝国主義的な利害関係によって、イギリスはつねに戦争の瀬戸際まで追い詰

められていた。最初は西アフリカ獲得をめぐる、それからスーダン周辺の地域の獲得をめぐる長引くフランスとの対立は、新聞紙上に帝国主義的プロパガンダと戦争の脅威でにぎわせた。ギッシングは、帝国主義を「企業連合」“syndicates”に基づくものと考え、強欲と暴力とが結合した帝国主義を憎み、かつ恐れていた。ヨーロッパの列強が精力的に植民地建設を行っていた最中に、ギッシングはしばしばベルツ宛ての手紙で、新しい暴力主義に背を向けていることが彼らのような人間の使命ではないか、と書いている。ギッシングの手紙は、しばしばキプリングと、キプリングが体现している歴史の傾向とを批判している。<sup>8</sup>

『命の冠』の中で、ギッシングは帝国主義の性格を明らかにし、それを打破する道を示そうとした。小説中の帝国主義の代表は、アーノルド・ジャックス (Arnold Jacks) という若いハンサムな事業家で、彼の個人的な生活と、彼の国際問題への姿勢の中には、ギッシングがイギリスの傲慢の典型とみなしたものがあらわれている。ジャックスは、リー・ハナフォード (Lee Hannaford) という、独創的だが冷血の科学者を崇拜するのだが、ハナフォードの専門は戦争で使用される火薬の発明である。より精彩を放っている人物のひとりであるオトウエイの兄アレクザンダー (Alexander) は、帝国主義を支える一般の人々を体现している。将来のことを考えないジャーナリストである彼は、彼の妻と子供たちと共に住んでいる、みすぼらしい部屋にピアズを招待し、ビールと愛国主義に酔っ払い、大英帝国を賛美する。このような人物たちと対照的なのは、ピアズの年取った父親ジェローム・オトウエイ (Jerome Otway) である。彼は、ゲルツェン (Aleksandr Ivanovich Herzen, 1812-70) やバクーニン (Mikhail Aleksandrovich Bakunin, 1814-76) を支持する、19世紀半ばの社会主義者タイプの精力的な人物で、温厚な自由論者として描かれている。

帝国主義に反対する思いやりのある登場人物たちは、ロシアから精神的感化を受けている。ギッシングのロシアについての知識は、明らかにツルゲーネフ、ドストエフスキー、トルストイを読んで得られたものであり、そのような知識をもとに、ギッシングはロシアの精神性がイギリスの帝国主義に対する解毒剤になると感じていた。闘争的平和主義を支持し、神秘主義的な理想のために、軍隊での服役を拒否したドゥホボル教徒 (Dukhobors) の信念の中に、軍国主義に対する彼自身の反対が純粋な形で結晶化されている、とギッシングは考えた。<sup>9</sup> オトウエイは、ロシア人の友人がドゥホボル教徒の運動に参加するために自分自身の出世を犠牲にしたことに強い感銘を受ける。

ギッシングが『命の冠』をイブセンやトルストイに送ったのは、おそらく彼らならば、当時の戦争肯定的な時代精神に対する彼の批判に興味をいだいてくれると思ったからだろう。

『我らが大風呂敷の友』(1901)

『我らが大風呂敷の友』は、1901年の5月に出版された小説であり、『流謫の地に生まれて』の問題を、ずっと低次元のレベルで焼きなおしたものである。主人公ダイス・ラシュマー(Dyce Lashmar)は、貧しい若者で、彼の口のうまさと個人的な魅力で、老齡の風変わりな病人、オグラム夫人(Lady Ogram)の好意を惹きつけようとする。オグラム夫人は、ラシュマー自身と、フランスの論文から彼が拾い集めた似非科学的な社会理論に非常に感心し、ラシュマーが彼女のかつての仇敵の対抗馬として選挙戦に打って出るためのお膳立てをする。ラシュマーは、彼の強運をできるだけ利用しようとし、オグラム夫人の秘書と彼とを結婚させようとする夫人の命令に逆らって、オグラム夫人の遺産相続人である彼女の姪に言い寄って、夫人の寵愛を失う。そして、オグラム夫人が死んだとき、ラシュマーは自分で掘った墓穴に落ちこんだことを知るのである。というのも、夫人の秘書が本当の遺産相続人だったからである。選挙で落選し、ラシュマーは、彼が教えていた男の子の魅力の乏しい母親とあきらめて結婚する。結婚直後、相手の女性のわずかな財産が狡猾な被信託人によって騙し取られ、ビッグチャンスをつかんでやろうとする彼の執拗な努力もむなしく、自分があいかわらず一文無しであるということに気づいたところで、小説は終わる。

『我らが大風呂敷の友』は、『流謫の地に生まれて』とは異なり、道徳的な問題に焦点を当てる小説ではなく、ひとりのよこしまな人物が自分自身の策略によって破滅する過程を描くことで自己満足している作品である。

『我らが大風呂敷の友』のもっとも興味深い点は、その中の、進化論的な理論を政治に適応することへの批判である。資本家たちは、経済競争を正当化するものとして進化論を賞揚した。そうすることで、経済競争は、必然的な、非常に都合のよい、ダーウィンの自然淘汰の一変種として擁護されることになる。一方、社会主義者たちは同じ生物学的な理論を、幾分違った形で利用した。シドニー・ウェップは、現行の政府が進化していった発展形態として集産主義的国家を賞賛した。『我らが大風呂敷の友』の中でギッシングが批判しているのは、まさにこの見解である。ラシュマーは、このように論じている。「ちょうど細胞が結合して、生物学的な個体をつくるように、ひとり

ひとり人間が結合して社会政治的な個体、つまり国家をつくりあげる。(中略)ひとつの細胞は、それ自体では、盲目的な運動にすぎないが、その細胞が集合して、ひとつの生物になる。人間はそれ自体では、優れた可能性をもった動物にすぎないが、そのような人間が結びついて、理性や文明や政体をつくりあげる」

このように進化の法則を人間の問題に適用することに対して、ギッシングは、1895年に読んだT・H・ハクスリー(Thomas Henry Huxley, 1825-95)の「進化と倫理」(“Evolution and Ethics”)の中の理論を対置させる。その中でハクスリーは、進化論的法則を政府にあてはめることはできない、と論じている。組織された社会とは、ある種の菜園のようなものであり、それは人間によってつくられた、植物が住む「技術の国家」であり、「自然の国家」に対する防御として機能する。社会も菜園も、進化の過程にともなう競争と自然選択に対する防御として存在するのである。

『我らが大風呂敷の友』の中で、ハクスリーの考え方は、貧しく若い貴族で、自分の使命を探求するデームチャーチ卿(Lord Dymchurch)によって体现されている。ある日彼は、ワーズワスが好んで彼の詩にとりいれそうな哀れみを誘う老人と出会う。老人は老齢のために彼の菜園の世話をすることができなくなっている。そこで、デームチャーチは、老人を助けるのだが、土を耕しているときに、人間の生活というものは自然との闘争に依存しているのだ、という啓示に襲われる。このように、ハクスリーが比喩として用いた菜園において、デームチャーチは、彼の友人のラシュマーが自然の法則を人間の問題にも当てはまる法則として受け入れていることはまちがいだ、と気づくのである。

## 第5節 死後に発表された小説

### 『ウィル・ウォーバートン』(1905)

ギッシングは彼の死後に出版されることになる、非常に興味深い小説を2つ残している。『ウィル・ウォーバートン』は、社会階層の梯子を下層階級へと転落していく人間の研究である。主人公は、心の温かい、気前のよい若い事業家で、地位はあるが芸術家肌の人間ではなく、ささやかな資産を、頼りにならない友人との事業のために失う。ウォーバートンは、彼の母親と妹を養うために、内緒で雑貨屋の店員になり、店員のエプロンを着るという不名誉を甘んじて受け入れ、カウンターの後ろで客の応対をする。貧しさが魂を

殺すというギッシングの思想の正しさを、ウォーバートンはじかに体験する。というのも、彼は貧乏な客たちと、そしてライバルの運のない雑貨商と、心を鬼にして戦わなければならず、共感や思いやりといった感情が彼自身から失われていくとを感じるからだ。身分を落としたことへのウォーバートンの慎ましい諦めは、画家としての見かけだけの才能によって出世しようとする、彼の友人のいんちきな成功と対比されている。そこで示唆されていることは、墮落の危険を追い求めるより、素直に心から「商業の時代」に屈服したほうがよい、ということである。小説の最後で、ウォーバートンは上流階級の友人たちから離れていく。ギッシングの意見としては驚くべきものだが、ウォーバートンはそのような人々と縁を切ってよかったのだということが、はっきりと示されている。

### 『ヴェラニルダ』(1904)

ギッシングは新しい感覚で『ヴェラニルダ』に取り組んだが、それは本質的な点では彼の他の小説とよく似ている。その中心的な関心は、バジル (Basil) という主人公が巧妙な策略の網をかいくぐって彼の恋人を捜索していく過程での、彼の錯綜した思考を追っていくことである。大きな社会変動と多くの戦争があった、ローマ人とゴート人との戦争時代に物語の時代は設定されているが、ギッシングの他の小説と同様に、話の展開は変化に乏しい。『ヴェラニルダ』には、教訓やイデオロギー的な側面は皆無である。そのような要素は、歴史上の関心事によってとってかわられている。

バジルは粗末ではない知性をわずかに備えた若い貴族で、崩壊しつつある文化を代表する頹廢的な貴族の子として生まれた。彼はしばしば火のような怒りにとらえられることもあるが、概して憂鬱で内省的な人物である。古いローマ時代の貴族を支配していた倦怠と無気力のために、バジルは他のギッシングの小説に登場する憂鬱なイギリス人の主人公たちとの顕著な共通性を示している。

『ヴェラニルダ』の物語は、東ゴート人の王トティラ (Totila) が南からしだいにローマに迫って来た 544 年から始まる。バジルはナポリ近くに住む彼の叔父の家で、ヴェラニルダという、婚姻関係によって彼の親戚になったゴート人の王女に言い寄り、彼女の愛を勝ち得る。ヴェラニルダが何者かに誘拐されると、バジルは彼女を救うために、彼の友人マーシャン (Marcian) とローマに行く。1年が経ち、策略に長けたマーシャンは、ヴェラニルダを見つけ、救い出すことに成功する。しかし、マーシャンはヴェラニルダに恋してしま

い、バジルは不実な男だと彼女に告げて、バジルを裏切るのである。

バジルはヴェラニルダが救われたことを聞き、戦争によって騒乱した地方を通してローマに行き、嫉妬にかられてマーシャンを殺す。バジルはカッシーノの僧院に隠れ家を求め、そこで聖ベネディクトゥスの精神的な導きによって心の混乱を静める。そして、そこでトティラと出会い、ギリシャ軍との戦争で彼のために協力することに同意する。バジルはカッシーノを離れ、ゴート人のためにいくつかの使命を果たした後で、ヴェラニルダとのつかのまの再会を果たす。未完成の物語は、ゴート人たちがローマを包囲し、ローマの街が飢えた人々の喧騒に包まれていくという副次的なプロットの途中で中断しており、ギッシングが計画していた結末までには、5章が未完のままだった。ウェルズが指摘したように、ギリシャの守備軍がすでに逃亡し、ゴート人の軍隊がまもなくローマの市街に侵入してくる、ローマの歴史の中では劇的な瞬間とも言える、荒廃したローマの情景で、ギッシングが物語を終えるつもりだったならば、結末はハッピー・エンディングだったと思われる。その結末が、同時にバジルとヴェラニルダが再び出会い、トティラの勝利を喜び、ビザンチンの専制から解放されたローマの情景であることは、想像に難くない。

『ヴェラニルダ』は、実在の人物を脇役として登場させ、その他の主要登場人物には架空の人物を配置している点で、スコットの歴史小説に似ている。しかし、ギッシングは、スコットやブルワー＝リットンの小説のきらびやかさや刺激に挑戦しようとしたわけではない。彼の意図は、ジョージ・エリオットが『ロモラ』(*Romola*, 1863)で、ヤコブセン(Jens Peter Jacobsen, 1847-85)が『マリイ・グルッベ夫人』(*Marie Grubbe*, 1876)で達成した効果に近づこうとするものだったと思われる。つまり、歴史小説に特有の、魅力的で際立った伝統的な舞台仕立てをほとんど犠牲にしても、信憑性のある、具体的な細かい描写を通して、登場人物の性格の入念な分析をするということである。きらびやかさや話の展開という要素にかわって、穏やかな雰囲気をほとんどこわさない挿話の導入やスムーズに進んでいく語りが印象的である。『ヴェラニルダ』は、6世紀のローマ人の感情や雰囲気を描くには成功しているが、人物描写の小説として見た場合、それほど成功していない。その理由としては、ひとつには、プロットがメロドラマによりふさわしいものであるということ、もうひとつには、バジルの人間性が本質的に興味を引かないということがある。

訳 注

テキストは Jacob Korg, *George Gissing: A Critical Biography* (Seattle: U of Washington P, 1963) を使用した。

- 1 ギッシングは 1878 年に生計を立てるために小説を執筆していたが、出版までには至らなかった。
- 2 ウィル(ウィリアム), アルジェノン, とともにギッシングの弟。以下ギッシングと関係のあった実在の人物については、第 1 章「ギッシングの生涯」を参照。
- 3 オーギュスト・コント (Auguste Comte, 1798-1857) は、人間の精神が、神学的、形而上学的、実証的という 3 つの段階を経て進歩するという、歴史発展の三段階の法則をうちだした。神学的段階は宗教の時代であり、形而上学的段階はルネサンスからフランス革命までの時代である。そしてその後の実証的段階は、科学の精神によって支配される時代である。コントは、実証的な方法で社会を認識することで、社会を有機的に再組織できると考えた。ギッシングは、1878 年 11 月 9 日にアルジェノンに宛てた手紙で、コントの『実証哲学講義』(*Cours de philosophie positive*, 1830-42) を絶賛している。
- 4 ツルゲーネフ (Ivan Sergeevich Turgenev, 1818-83) は、1862 年に書いた『父と子』で、すべてのものを否定する主人公バザーロフの思想傾向を「ニヒリズム」という言葉で世に広めた。その後、とりわけロシアのナロードニキ運動の担い手たちが、彼ら自身の思想を表現するために「ニヒリズム」という言葉を受け入れた。だが、後者の場合、「ニヒリズム」という言葉は、自己否定、自虐的な態度ではなく、人間に課せられるあらゆる拘束を個人の自由のために拒絶することを意味していた。
- 5 ギッシングがマンチェスターのオーエンズ・カレッジで窃盗を働いたことに言及している。
- 6 サン=シモン (Henri Saint-Simon, 1760-1825), ロバート・オーエン (Robert Owen, 1771-1858) はともに、近代産業主義の問題が、共産主義的な協同組合経営によって解決できると考えた。とりわけオーエンは多くの人々に影響を与え、オーエン自身と彼の思想を信奉する「オーエン主義者」とが、1830 年頃からイギリスと北アメリカでさまざまな共同体建設を試みた。『民衆』のミュートィマーの試みも同様に、炭鉱を協同組合方式で経営することであり、彼の建設した共同体には、図書館などの教育施設も備えられていた。
- 7 F・D・モーリス (Frederick Denison Maurice, 1805-72)。1848 年にチャールズ・キングスリー, ジョン・マルコム・ラドロー (John Malcolm Ludlow, 1821-1911) とともに、「キリスト教社会主義」の運動を始めた。労働者の教育を重視し、1854 年に「労働者大学」を設立した。
- 8 ラドヤード・キプリング (Rudyard Kipling, 1865-1936)。インド生まれで、イ

## 第12章 その他の長篇・中篇小説

ンドでの生活を題材にした多くの小説と詩を残した。イギリス人による植民地支配を、当然のものと考えていただけでなく、むしろイギリス人の義務として考えていた点で、しばしば帝国主義、植民地主義を代表する作家として見なされている。

- 9 ドゥホボル教徒は、1890年代に、徴兵を拒否したことで知られるが、1898年末にカナダに移住し共産村を建設したことで有名である。移住の際には、トルストイが全面的に協力した。1907年(明治40年)にロンドンを訪れ、クロポトキン(Petr Alekseevich Kropotkin, 1842-1921)に会った有島武郎は、クロポトキンがドゥホボル教徒の共産村の成功を願っているのに感銘を受け、帰国後北海道で彼の「有島農場」を小作人に開放し、「共生農園」を開始した。

(光沢 隆 訳)